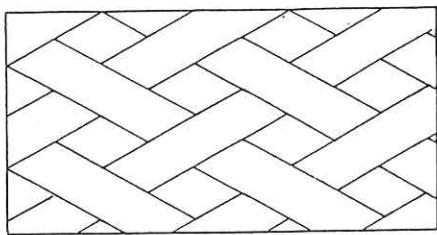


付  
編

第一  
章

城崎だんじり祭



籠 組



## 第一節 祭りの意義

祭りの語源はカミに獻供するマツルにあるとみなす説が有力である。そのマツリという言葉に神人一体感 繼続をあらわす「フ」という助動詞がつくと、マツロフ（奉仕、服属）となる。われわれの祖先は山・水・海・滝・岩・木・植物や動物・風・雨・雪・雷・太陽や月星辰などあらゆる自然物、自然現象や精靈に対し畏敬の念を感じ、そこに「カミ」を見い出し靈得してきた。

そして「カミ」はまつることにより現れると信仰されてきた。そのなかで「カミ人をつくり、人力ミを敬う」精神を培ってきた。

カミをまつることは遠い祖先以来の伝統であつて、生きる喜びも楽しみもまた悲しみも苦しみもそこに組みこまれていた。一族や村人が集つて祭の場を設け、カミを迎えて神人一体となつて祈願をかけあるいは感謝をささげる。

このハレ（晴）の場における神人一体感が祭りの本質であった。大むかしの人々は、目の前にカミの出現を感じていた。カミの名をきいて急いで祭りを行つたという話も語り継がれている。現在の人々もそこにはいます。が如くにして祭る作法を伝えている。神の出現を待つ標識を立てるこもあつた。神木・賢木などを神の依代の神籠ひもうらとして神聖視し、仮屋形を構え、御幣・鉢・旗幟を立てたり、磐座・神体山いわくら（神奈備かななび）あるいは鎮守の森（杜）などを崇敬してきた。

仏教が日本に伝来したのは六世紀半ごろといわれ、それまでは神仏習合のカミは日本になかった。仏教が伝來してわが国固有の信仰に習合すると、カミは仏菩薩のようにその姿を彫刻で現されることがはじまつた。神像がこれである。

文献によれば神社建築のはじまりは五世紀ごろとみなされ、神明造りや大社造りの様式が古いといわれる。九世紀のはじめに最澄が天台宗を、空海が真言宗を伝えて、しだいにカミと密教との習合がなされるようになつた。たとえば八幡神は阿弥陀如来、天照大神は大日如来なりなどと称して本地垂迹説が唱えられるようになる。

**四所神社の由緒**　四所神社の縁起に道智上人が「四所明神の本地は觀音なり」と述べているのもその例である。延長五年（九二七）に『延喜式』が撰上され、その卷九と卷十に政府公認の神社を記載する。いわゆる「式内社」がそれである。人々の願いにそくして、職業神・守護神・村の鎮守・産土神から山や水や田の神など「カミ」観念はさまざまに展開し、子孫の安全を守る祖先の神靈とも融合していった。このほか世俗の生活を反映し、富貴長寿を願い除災招福を求めるなど祭りも多様となつた。

四所神社の祭神はつぎの四座である。

湯山主大神——温泉そのものを神とする。

多守津比売命

いわゆる宗像三女神で、北九州から北上して分布する。主として漁撈民の資<sup>じ</sup>く神々。

市岐島姫命

元来祭りはハレの所爲であつたからその神聖な状態を保つ作法が必要であつた。だれでもハレに近づくこと

が出来た。こうしてカミの大前に立つて、嚴かにカミの意志を受ける。巫女に託して神の言ことばを聞くこともある。占いの技術を以て、判断することもあった。あるいは力を鬪わせ相撲・競馬・綱引・鬪鷄など勝負によつて神慮をうかがうこともあつた。柳田國男は日本人の生活構造を二極に対置し、「ケ」(日常)と「ハレ」(非常)とに分けて、祭りのときのことさら常軌を逸する日本人の本性を述べている。

もともと土着の神々は、郷・ムラなどの小地域の人々によつて斎きまつられ、おそれられていたが、後代になると武の神たる八幡神、国家にさえ崇る程の靈威を示した天満天神、夏の疫病よけの八坂祇園神などの信仰が流布した。平安時代以来天台、真言の加持祈祷といふ強力な効能をともなつて出現する信仰もあつた(四所神社の境内社にも天満宮・八幡宮が併祭されている)。近世に入つてから祭りに対する人々の意識、社会や生活環境もいちじるしく変貌していった。

この時代、町民は祭りを楽しみにし、リクリエーションの色彩が濃厚になり、中世の宗教的意識もしだいにうすれていった。

日本三大祭りといわれる京の祇園祭・大坂の天神祭・江戸の神田祭はその代表である。他の社寺の縁日のまつりや法会にしても、次第にはなやぎ觀光的神事や祭礼としてのおもむきが濃厚となつた。江戸時代、なかでもいわゆる「元禄時代」になると、前の時代に第一義とされた祭りの宗教的意義がしだいに失われ、第二義的となる状況も生れた。文治および政治などの影響もある。庶民の興隆期、商人の金権力が祭りにも反映されるようになる。庶民の文化向上と風流が祭りに表現される。

ケッペンは「綱吉(五代將軍)一六八〇—一七〇八)ハ最モ秀レタ君主デアツテ国ハ富ミ民ハ榮工国民皆安

堵シテイタ、イカニ日本ノ古代ノ歴史ヲ回顧シテモ、コノヨウナ幸セナ時代ハカツテナカツタデアロウ。」といつてゐる。

湯嶋村の豪華絢爛たる秋の『だんじり祭』の起源も、この爛熟した江戸時代の文化と町人の力を関係づけることができるであろう。「カミのまつり」が祭りの原点であつて、神威の日であり「ハレ」の日であることと、「だんじり祭」と区別して“まつり”を楽しむことを望みたい。

## 第一節 氏子総代

**神仏混合禁止令** 明治新政府は慶應四年（明治元・一八六八）神仏判然令（神仏混淆禁止令）を出した。

「中古以来、某權現アルイハ牛頭天王ノ類、其ノ他仏語ヲ以テ神号ニ相称ノ神社少カラズ

候。何レモ神社ノ由緒委細ニ書付ケ早々申出候コト。

仏体ヲ以テ神体ト致シ候神社ハ以來相改メ申スベキコト。

本地ナドト唱ヘ、仏像ヲ社前ニカケ或ハ鰐口、梵鐘、仏具等ノ類差置候分ハ早々取除キ申スベク候コト

右之通り仰セ出ラレ候事」

明治四年（一八七二）神社の社格を定め「氏子取調べ規則」を制定して、「純一神道祭祀之令達」を発した。

「支配下村々ニオイテ是マデ寺院修驗ノ向神事ニアヅカリ候神社コレアル趣ノ処、兼不テ御一新御布令コ  
リアル通り已來寺院修驗ノ向、神事ニ参与致シ候儀相止メ純一神道ヲ以テ祭祀致スベキコト

右之趣役人ヨリ其ノ寺院修験へ申聞カセ決シテ神事ニアヅカリ申スマジク候タメ。

八月

久美浜御役所

丹波、丹後、但馬村々役人

明治六年（一八七三）一月行政村単位ごとに、村社を認定することとなり、「村社四所神社」として、温泉寺別当職支配から完全分離することとなつた。このころ神主と氏子総代により、「氏子札」が配布され、「神社氏子制」が確立された。これは江戸幕府によつて仏教寺院の檀家制度・宗門改め制度が確立されたことと類似している。

「氏子総代」とは名のとおり、神社の氏子（敬神崇祖の信仰集団）の代表であり、神社の祭祀や運営・維持管理のための役員である。

氏子総代会は、神主と氏子を結ぶ重要機関であつて、総代会に代表が選ばれる。代表は神主とともに人々の属する鎮守氏神を護り、なお神社序など中央・地方の行政庁との接触や、すべてを総括運営をする。そして神社が立派に保たれるよう、とくに住民の崇敬心の昂揚をつねに心がけることが大切である。

秋の「だんじり祭」はいわゆる四所神社の年一度の最大の祭礼である。しかし「だんじり行事」は伝統による若衆連中の自主的行爲で施行されるのであって、氏子総代はこれに対し直接に指揮監督することはできない。その昔、明和元年（一七六四）温泉寺住職であつた祐趣法印が村役衆および若連中を集めて「四所神社の祭祀に當り奥若衆に末永く御輿太鼓のことを粗略にせぬようつとめよと申附けた…」とあるが、いまではそのようなことは神主でも氏子総代もできない。そもそもだんじりの運行は御輿の渡御に従うものであり、神事の一環

は、その歴史にうかがうことができる。  
中世以降において、郷・ムラにはそれぞれ「宮座」という祭祀組織があった。湯嶋村の場合、上ノ町・中ノ町・下ノ町の集落構成があつて、それぞれ神事に参与する宮座の特権があつた。江戸時代になつて幕府の仏教保護政策で、温泉寺が隆盛におもむき、別当職が神主職をも兼ね四所神社の祭祀を掌握していた。また湯治場として名声も広まり、その経済的発展にともなつて村役衆の特定の人々が宮座の特権的地位を得て江戸・明治と時代をかさね今日の姿となつた。

近世まで四所神社を中心、「宮畠」——宮田か神田があり、それを分岐点に湯嶋村を上・下に区切つていた。そのありようは『温泉寺文書』によつて若干推察することができるが、当町には「大頭衆人日記」や「社結鎮



写295 社前に据えられた御輿

として稚子行列とともに考えられるべきものであるから、御輿が動かないのに「だんじり」だけ動くことはあり得ない。したがつて氏子総代に名をつらねる人々は「会」としても「個人」としても「だんじり祭」に充分の認識と理解をもち、賑かに安全に計画どおり祭りが執行されるように努力すべきであろう。

また四所神社の場合でも以前は温泉寺別当が、神社祭祀や維持管理などをつかさどつていたこと

座帖」「結鎮御頭次第事」などがないので総代などの活動状況はなお不明である。現在の総代制度には従来の慣行がおもに引継がれている。そして総代には寄進の額や、社会的地位などの人物評価によりそれに地域的な配慮もはらわれて推せんされるがその任期は定かでない。また総代の職務を要約すると

一、宮居の維持・管理にあたる。

二、祭祀の計画および執行。

三、氏子の信仰心の高揚をはかる。

四、神主を通じ神社庁や関係機関または他町の総代との連携など  
である。

(参考) 昭和十五年六月三日四所神社

「郷社昇格願」提出時総代名

石田松太郎	結城	葵	日生下重郎助
児島 国治	竹内 滉藏	佐藤甚太郎	
昭和五十四年十月現在			
久保田寿一	石田 弘	井上基一郎	西村 四郎
片岡 真一	河原庄三郎	伊賀市太郎	黒田 吾一
昭和六十一年十月現在			谷口 徳一
久保田寿一	片岡 真一	黒田 吾一	井上基一郎
坂本 文也			

石田 弘 久保田庄吉 生田 俊郎 竹内 康文  
以上が氏子総代として列記されている。

### 第三節 ふるさとの心と祭り

この温泉町にも初夏から町内でつぎつぎと夏まつりが行われている。まつりは人々に季節の移り変りを感じさせる。少年少女時代の想い出に郷愁を覚え、子ども達に祭りの縁起や意義の昔ばなしを語り伝えるときもある。催し物も相撲・福引・映画・花火・踊り・護摩焚き・露店の数々、当日叩く威勢のよい「だんじり太鼓」の音に誘われて親子連れの人々で町は賑う。

四月二十三、四日の「温泉祭」は昭和九年以来温泉寺の開山忌と観光まつりとしでその賑いをみせる。温泉に対する報恩と感謝の心のあらわれとしての行事である。

「夏まつり」は

六月 三宝さん 秋葉さん

七月 祇園さん 清玉稻荷さん

鬼子母神さん 若上萬稻荷さん

妙見さん 不動さん 愛宕さん

庚申さん 川下さん

八月 行者さん 天神さん など。

心をつなぐ 神仏習合の民衆信仰に支えられた「まつり」が永続している。そして民俗的風習と行事が地  
ふるさと意識 域ごとに脈々と生きつづけている。地域が都市化することによって人々の生活様式や態度が  
大きく変化し、それにつれて地域の年中行事が簡略化され、「ふるさとの心」がしだいに失われつつある。そ  
して時代の変動とともに人々の信仰心もうすれて行くから、祭りに対してもこれからはさびれてゆくだろうと  
みる民俗学者や社会学者もいる。

しかし実際には予想外に、むしろ祭り意識は旺盛となり、都会では祭りがその人達の共感と連帶意識を呼び、  
そこに住む人々との心をつなぐかけはしともなっている。

その昔、私達の祖先は同じ地域に住むムラの人々と同じ神を祭ることで、ムラたる地域社会を恙なく運営し  
て来た。お互に頼りあって生きて行かねばならない宿命をもつ人間同志の智恵ともいえる。このことはいま  
も昔も変りはない。いや人間の存在がさまざまに分断されかかっている現代こそむしろそうした希求は強いも  
のではないか。近年祭りが盛んであるのは、この場が共通の「親睦」のよりどころであるからであろう。

また祭りのもつもう一つの役割には非日常性の、ハレの空間と時間を創出するという意義がある。衣装によ  
る変身、仲間たちと一緒にやるさまざまな出し物とその芸能、鉦や太鼓とかけ声のリズム、興奮によつて人々  
はハレの場所で自分を解放する。せちがらい世の中にあって祭りは遊びにかかる人間回復の場もある。

これから激しい変動の時代を生きていくにはどうしたらよいか、祭りばやしはその智恵を与えてくれそう  
な気がする。

ハレの日 秋十月十四・十五日の両日は、氏神さま四所神社の秋まつりであるが、古い歴史と伝統ある「だんじり祭」として有名である。この日燐然と飾られた神輿の神幸や氏子の稚子行列を中心として、上部下部の四台のだんじりの動きと「せり」の面白さに、湯の街は二日間、男女ともども大人も子供も老いも若きも陶酔境にはいる。他郷で暮す人達も帰郷してこの祭りにとけこむ日である。

小若・若衆・執頭・後見・助・警護の組織や、連中宿を中心とする古風な地域の自主的行事の中に、若者たちは秩序と興奮のるつぼのハレの場所で自己陶酔し湯島人の心意気を感じる。それは単なる遊びでなく人間と人間の自制と秩序のもとに「カミ」の儀式と捉と神威を感じとることができ、「ハレ」の日である。

ある作家がつぎのように評している。「見ていると山車の動きそのものに一つ一つの人格が乗り移りその囃子が人間的な叫び声のようさえ聞えてくる」と。

またある文人は、「夕やみせまるころ王橋の三つ巴のセリ合いがおさまると、神輿につき従つて上、下の山車だんじりは仲よく四所神社に向かう。互いに打ち鳴らす太鼓・鉦の音・山車をかつぐ人々のかけ声にこだまして一脈の哀感がただよう。やがて神輿が宮の奥深くおさまると、今までの急調子な勇ましい囃子は一変してゆるくなり、別れのひとときを惜しむのであろうか、情感高まり観衆も肅然として思わず目がしらが熱くなる思いである。これ以上ゆるく打てまいと思われるほどの緩徐なテンポの中にも正しいリズムが流れ、無数のちようちんに照らし出されて、足取りも重くなり山車は上・下に別れて行く。一足ごとに遠ざかりゆく山車じつと見送る人々。二日間のけんらんたる祭典のラストシーンとしてこれほど感激的なものがあろうか」と結んでいる。こうしてだんじりの姿は人々の前から消え失せ、囃子の音も人々の騒音とともに

に消え去るが、いわゆる“ふるさとの心”はいつまでも人の心の底に消えることはないだろう。

#### 第四節 秋のだんじり祭

大正十四年（一九二五）五月二十三日の北但大震火災により城崎温泉は焦土と化した。したがって「祭り」の中心たる四所神社の社殿も、うつそうたる杜も宝物や諸記録・祭具類等一切が鳥有に帰した。その後昭和二年十一月一日新社殿が再建され、同月十五日遷宮式もひが行われた。ついで昭和九年（一九三四）氏子有志により神輿・祭具一式および下部だんじりが復興した。上部の「神輿台」および「小だんじり」は薬師境内の小屋にあつたので焼失をまぬがれて今日にいたっている。

「だんじり祭」の歴史を語るには当然四所神社の由緒縁起を述べねばならぬ。その要点はつぎのようであつて人口に膾炙するところである。

一、四所神社は、和銅元年（七〇八）日生下アシマツ權の守が夢に現れた出石明神の四箇の神の眷族けんをそのお告げにして人目に膾炙するところである。

たがつて「四所明神」とあがめ村人とともに宮居を建てていっ寄まつつた。

二、その後十年して、養老元年（七一七）道智上人といふ聖人ヒビリこの社に一千日參籠ささんろう、老翁おきないでたまいて湯処を教えたのが温泉発見のはじまりでいまの曼陀羅湯であると伝える。温泉祖神は四所明神であるといわれる所以である。

三、四所神社は中世以来温泉寺歴代の社僧によつて祭られてきた。文献的にも温泉寺の『縁起帖』は、室町時

代末に書かれており、四所神社の縁起はそれにもとづくといふ。

四、「曼陀羅記」は日生下・結城・石田三氏の所蔵するところで、江戸時代末期から明治時代に書かれたものである。

社寺の縁起はおむね伝説に属するもので、正史とすることはできないといわれている。

「江戸時代も中期以後商人農民を含めて記録の時代に入った。その面では世界一だったのではないかと思われる」とは司馬遼太郎の意見である。明暦元年（一六五五）の『別当坊支配寺社之控』によると「四所神社神殿修復是より前知らず…」とある。寛文九年（一六六九）の記録に「このころ温泉寺盛況となる。名僧出でて法灯盛ん。祐智没七十歳」とみえている。すなわち十七世紀後半からしだいに四所神社の記録が明瞭となる。

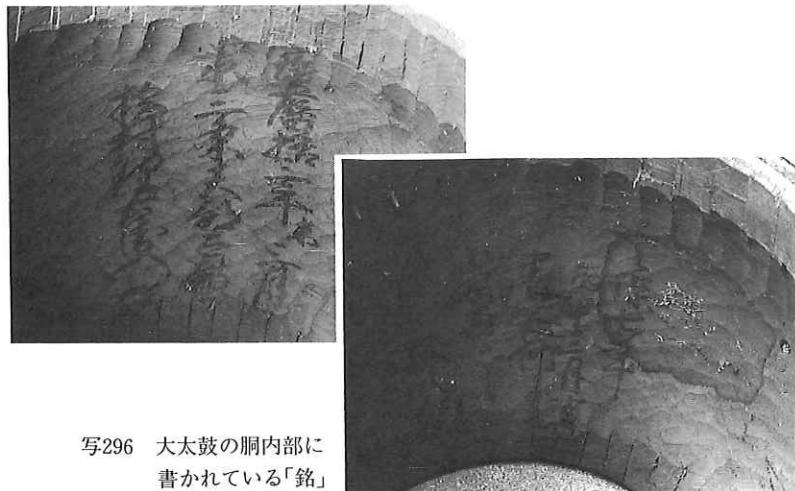
五、温泉寺の古文書からの(3)で四所神社の祭典は歴代温泉寺の住職が執行してきたことを述べたが、さらに同寺の記録には、つぎのように記されている。

イ、「御本社の神輿は、享保九年（一七二四）甲辰の年秋出づる也。四方の戸帳并に鏡衆綱篤莊嚴幽、奥口の氏子中の寄付也。別に其の時の記録有る也。」

ロ、「宝曆四年（一七五四）『温泉寺年中記録』の『祭礼行列之覚』に「四所神社は温泉寺別当が執行する。九月朔日午すぎ飾等を仕立て神輿を下し觀音の内陣に入れ置く也」

「八月二十二、三日頃九月九日の役人の覚え書きを相調べ伝四郎（湯女方）迄持置く也。」

ハ、明和元年（一七六四）『御輿台太鼓之事』に



写296 大太鼓の胴内部に書かれている「銘」

「元来、明和元年申年迄祭礼惣役については、三人當て相勤め候所其の後人々廉略いたし太鼓捨て置候こと度々におよび右に付当寺祐趣法印、氏子中相談の上奥湯若衆末永く太鼓の役申付けらる。其の故に若者これある家には外の祭礼役は之を除く定めなり、口湯だんじりは翌酉年（一七六五）出来御旅所も同年に四所神社の拜殿を下え引建て置く者也。其の以前は下の次郎兵衛塚に假の小屋かけ御旅これあり候事

右太鼓之儀に付争論に及び仍て之を知る。

庄屋 大津屋宗七

年寄 宮前市右衛門

奥湯若者連中（連中十六名）

（明和元年 御旅所 現弁天社）

二、御輿太鼓胴内の年記銘に

○宝暦十三年（一七六三）末三月

京三条 松村理右衛門

○天保七年（一八三六）丙申三月吉日

養父巴 山保屋孫八

以上の諸記録によれば、中世以前のことはたしかでないが、近世、江戸時代以降の記録によつてつぎのようなことが判明する。昭和六十年（一九八五）から遡つて、三三〇年前四代将軍家綱のころ四所神社の修復をしているが、それ以前は「知れず：」とある。

二六〇年前八代将軍吉宗のころ本社の神輿が奥口の氏子中の寄付で完成した。「九月一日、飾り立て觀音の内陣に入れる。」とあるから温泉寺から施行され、その後四十年たち明和元年（十代将軍家治のころ）にまず上部の御輿太鼓いまの「御輿台」がつくられ、翌年に口湯だんじり、すなわち下部の「大だんじり」ができる。全御旅所が弁天山に建つた。それまでは越中次郎兵衛塚（いまのスーパーワダ）に仮小屋を建てこれにあてていた。

明治五年（一八七二）太陽暦が採用され、九月九日が十月九日に変更されて、その後内川筋の統一まつりとして現在のように十月十五日となつた。

**だんじり** だんじりとどうしていうか、どんな文字をかくか、実は意味はわかっているようでもいろいろの字義 説がある。第三節「ふるさとの心と祭り」のところで二人の作家の一文を紹介したが、二人とも

「山車」と書いて「だんじり」と読ませている。これは正しいのか、正しい「だんじり」の文字であろうかと疑問をいだく。実は「だんじり」にはつぎのよう多くの文字が使用されているからである。「だんじり」の文字は「山車、地車、檀尻、檀轆、段尻、車樂、舞車、台車、太鼓台、山鉾、屋台：」等々。岸和田市の「だんじり祭」は九月十四日、十五日の両日に挙行される。数十台のだんじりが市街地を練り廻るというより駆け

めぐるという言葉の方が実感がある。この市に『地車研究会』があつてその会から『地車研究』なる雑誌が発行されて注目をひいているが、その一節を紹介してみると、「十三の丸神社の中興縁起によれば地車の初めは元禄十四年（一七〇二）となつてゐるが今のように彫刻が立派になつた始まりは天明四年（一七八四）頃であろう。現在岸和田では七十五台ある地車の中で一番古いのは紙屋町の地車である。この地車は天保十二年（一八四二）に製作された…」。

このように岸和田だんじりでは「地車」と書かれている。城崎の大だんじりは、構造・形体・その大きさなど岸和田だんじりに似ているが、さらに「同研究誌」によるとつぎのように記している。

「地車は平地の神社祭礼に曳き出されるものであり単独に曳き出すものではなく、神輿の渡御に奉仕する出しものである…」。

「地車は檀尻と書き社檀の義で大嘗会の標山のよろに神靈の乗輿たるが本義だったが近世にいたりその本義を没却した娛樂物の觀を呈し…」「古い型の車樂は、みな車輪が大きく径五尺、六尺もあつたものが今日の如く直径一尺、二尺位の車輪に変わり…にじるが如く引き廻る車即ち“だんじり”という名が起つたものという」。

「檀尻」と書く文字から判断される説に「檀」は土を盛り高く築いた祭場で「尻」は知り、しらすの約言で、だんじりは土地の氏神の御車であるとみなすものがある。太鼓台と書いて「だんじり」と呼ぶところが、淡路・大阪・播州付近に多い。「ないだんじり」ともいう。徳島では「ヨイヤショ」讃岐では「チヨウサ」と呼ぶそうだが、城崎では上部かみぶの御輿台みこしだいを「ドデン」とか単に「台だい」と呼ぶのと同じことだ。この型式

は「ふとん太鼓」とも呼ぶが、高低の多い道や丘や山路につかわれるので、「段尻」の文字を当てるという。最後に「山車」は「ダシ」とも「屋台」ともいって、京都の祇園祭の山鉾を考えればわかるように、屋台・山車の上に「神の憑り代」としての高い棒とその先端の鉾をたてたり（鉾・幡・榊・真木・御幣など）あるいは人形・花を飾り、音頭とりが笛や太鼓で賑かに祭り気分を盛り上げる囃子車はやしがある。高山祭・長浜祭などは皆この部類に属するであろう。

『婦家日記』丸亀藩の閨秀歌人井上通女は、元禄二年（一六八九）の大坂天満天神祭の記事に、「広前あたり、ところせまきまで地車というものが宿いしつつ夜どおし囃し立て、その辺りとどろくばかり車おす若者らは紅はなたのひとえぎぬを、しらけなげにうちきて、一群に集いよる：車の後には鬼ともおもわれるような男の赤裸なるが競いかかり地車右左にめぐらし、後ろむきに肩で押すさま、やがて押し倒すような勢で幾群となく宮居どのの方へひいていくようすは、いとあやぶげなり……」と述べる。この文にあるように、大阪では三百年前すでに地車が荒々しく練り廻った記録が残されている。

とくに荒々しく練り廻す習慣や上下左右にゆさぶる様子は、「城崎だんじり祭」における大だんじりの宮入りの風姿を彷彿させるものがある。またこのころの文につぎのようないがある。

「…かの段尻といえる舞車われもわれもと引きつれて天満に向う。車の上は桧皮もて葺き前一段低く四方に欄干あり、その上に舞子あり太鼓つつみの音かしましましきまで聞ゆ：」と書いている。

だんじり太鼓  
古くから城崎温泉に、「田舎饅頭」という菓子があつて、名物の一つとなっていたが、昭和四十年頃「だんじり太鼓」と登録されて銘菓となっている。「だんじり太鼓」の語感は何と

なく秋まつりの郷愁をそそる。そして親しみを覚えさせる言葉である。

昭和四十三年頃観光用ショーアの一つとして「城崎だんじり太鼓連」が組織されて今日にいたっている。その経緯は、さだかでないが時代の流れであろうか、観光協会とだんじり太鼓愛好の人々との合議の結果という。今まで、町内はもちろん各地の招聘に応じて出演し、京阪神・但丹一円・四国・広島等に出かけ好評を博している。然しながらこの十数年間の反省にたって、中止しようかとの意見も聞かれるが、その理由としては、

一、会員がそれぞれ職業をもち日々の生活が多忙になってきたこと。  
一、祭りの日のだんじり行事の中においてこそ、その面白味があるが、他所でショーアとしての太鼓はまつりの趣きと大分異なること。

一、会員中病人・高齢者が出て脱落する者が増えつつあること、などをあげている。

演出効果をあげるために、秋祭りの状況を映画にして公開し、解説する方法も経費等で困難があるようである。要するに城崎に生れ、育ち、生活している私たちの祭りの行事における「だんじり太鼓」であつて祭りをはなれ、だんじりを除いた、「太鼓」では誰もが強い共感をいだかぬのであろう。

まして城崎以外の人達にショーアとしての興味のほかは感動がともなわぬのは当然ではなかろうか。

「だんじり太鼓」の先輩の人達が、今後も機会あるごとにだんじりの正統なリズムをつぎつぎに後輩へ伝えることは、だんじりとともに郷土の優れた文化的遺産を継承することで、私たちの使命であろう。したがつて、だんじり太鼓は祭りの行事、すなわちだんじりの動きの中で本能的に感得すべきものであつて、たとえば某太鼓方の先輩の言葉に、「喧嘩太鼓」というものはない、だんじりの動き、若衆の喚声と氣合とからだの動きの

中に自然に「いさみ太鼓」が生れるものである……と。実に簡にして要を得た言葉だと思う。祭りの二日間各所で展開される上部・下部のだんじりのせりの場面における太鼓の響きは、山狭にこだまし緊張と勇壮な感動を人々の胸に与える。

宮入りの状況や夕やみせまる王橋のシーンなど、何か人格がだんじりに乗り移っているような、沈痛なまでの感激と血わき肉おどる興奮の場面である。各所でのだんじりの芸の場面もまた然りだ。これは一つに「だんじり太鼓」の効果といってよからう。

「太鼓の音は、神の好む音」

太鼓は神の乗り物

以下上部・下部の太鼓方をつとめた人達からきいた話を伝えよう。

◇だんじりの囃方について

叩く順序は、小太鼓・大太鼓、ついで半鉦、その叩き方・鳴らし方は、いろいろあるが、だんじり小屋から早晚曳き出して執頭宿へ進む場合は「休み太鼓」を打つ。まず大太鼓の縁ゆきを一回「チャ、チャ・チャ、チャ」つぎに中を一回「ドン・ドン」と、小太鼓はこれに合わせて叩く。だんじりが小屋に帰るととも同様である。普通の叩き方は、進行も後退も同じである。

大体「三・五・七」の調子であるが大太鼓はやや難しい。小太鼓は、「チキチヤン、チキチヤン、チキチヤン……」大太鼓は「ドロツクテン、ドン・ドン・ドン・ドロツク、ドロツク・ドロツクテン……」の感じで叩くが半鉦は小太鼓に合わせて叩く。この三つの調和がだんじり太鼓の基本である。

十四日（宵祭）の朝九時ごろから十時四十分ごろまでは、町まわりでいわゆる「稽古太鼓」といつて、助クラスの有志が叩く場合が多い。執頭宿を出て下部区域一帯を廻るのである。そのときの太鼓の要領はおおむねつぎのようである。「チキチャン／＼／＼」の繰返しを基本とする。

執頭宿から王橋へ向う。

＼ヂヤ・ヂヤ・ヂヤ＼＼＼＼

＼チキ・チキ・チキチャン＼＼＼＼

王橋を渡るところで

＼チーン・チーン・チーン・チーン＼＼＼＼

しだいに早く

＼チン・チン・チン・チン・チン＼＼＼＼

北側に出ると、

＼チキチャン・チキチャン＼＼＼＼となり

＼ヂヤ・ヂヤ・ヂヤ＼＼＼＼

＼チキ・チキ・チキチャン＼＼＼＼

地蔵湯橋は、王橋と同じ要領で叩き、駅通りに出て、

＼ヂヤ・ヂヤ・ヂヤ＼＼＼＼

＼チキチャン・チキチャン＼＼＼＼



写297 王橋で肩入れする桃島の御輿台

と五回繰返して駅前に出る。

チヤ・チヤ・チヤ

ヘチキ・ヘチキ・ヘチキチヤン

カクして定刻執頭宿にかえる。

効味が加わる。

「いさみ太鼓」というのは示威や敵対意識を示すために速度を早め・強く・変化をつけて勇む場合で「けんか太鼓」ともいう。太鼓の音を聞いていれば判るが相手方の上部のだんじりを意識して打っている。

たとえば「宮入り」(宮遷式)の場合に勢をつけるために中部区域(元町・宮本町)を五・七・九回と往復する。まんだら橋で二回、薬師橋で三回と一応往復することになっているが、実際はもともと太鼓方の権利で決めることがある。だんじりの勢と刻を合わせるのは骨があるという。

勇みをかける太鼓の音は

ヘタラテツトンントン・タラテツトンントン／＼

半鉢は

下部 大井武司・早川徳一・二本松成政・伊東佐一郎・守口孔一・垣谷次郎

中部 谷垣健三・島満寿雄・谷口光一等々であるという。

大だんじりが宮入りをしたとき、トツテンマングリとともにゆつたりと「かんぶり」を振る動作をする。

の芸である。だんじり太鼓の美しい音色は七年ぐらい経つと皮がゆるむので、皮を締めなおすのに大阪の難波にある通称「太鼓政」いまの「中兼」に持つて行つてなおすが、城崎のだんじり太鼓はなかなかむずかしいと  
いうそだ。

◇御輿台の太鼓について

赤い半纏を着て黒の角帯をしめ赤の帽子に黄色の鉢巻きをし、一人向い合つて御輿台（通称「台」という）に乗り太鼓を叩くので、通称この二人を「太鼓」ともいう。「台」の動く順序に従つて周囲の状況を見ながら叩き方を変えていく。したがつて太鼓を叩かなかつたら「台」は動かない。

「休み太鼓」「待ち太鼓」

「台」が路上で休憩しているときは一人でゆつくり、ヘドン・ドン・ドン・ドコ・ドコ・ドコ・ドン・ドン・



写298 上部みこし台の太鼓

ドンと、同じテンポで一拍子で小さく叩きつづける。「御輿台」のことを町の人は「ドデン」というが、これは太鼓の叩き方がヘドデン・ドデン・ドンデンドンを基本とするからである。「台」を担いでいるときは、大体この叩き方でテンポをゆつくりするか、速くするか、また弱く叩くか、普通に叩くか、強く叩くかで動きが変る。担いで普通に歩くときはゆつくり普通に叩き、担いで走るそのとき、（勇みをかけるという）には速く強く叩く。このとき担ぐ人達は太鼓に合わせてハイヤサ・イヤサ・ヨーカタイと掛け声をかける。得意なときとか勢を示すとき一種のデモンストレーションになる動作を「芸」といい、「肩入れ」と「さし」（ヤレサセ）ともいう）がある。

「肩入れ」は、普通は棒を担いでいるがこのときは、台の下の所に肩を入れ御輿台を高く担ぎ上げる。このとき「カタイレ、カタイレ」と掛け声をかける。この動作は普通「勇み」をかけたあとするもので、太鼓を強く速く数回叩く。そして肩を入れたあとは、しばらく太鼓をゆつくり弱く叩いて全体のバランスを確かめる。その後普通の速さで強く一リズム叩き、叩き終るのを合図に台の下を肩からはずし縦棒・横棒を肩で受け止めやさぶりをかける。また「さし」は「肩入れ」と同じような動作だが、手の平を台の下にあてて腕の力で「台」をなお一層高く差し上げる、このときは「ヤレサセ、ヤレサセ」と掛け声をかける。これはより一層得意になつて勢を誇示するときに行う。こ

彼らの芸は非常に勇壮な動作であるが、全員一つ心で揃わぬと大きな事故を起すこととなる。

「台」は普通縦・横棒を二十人で担いでいるが、地面におろして引き擢る（ズリという）こともある。このときは太鼓は同じ調子の一拍子で叩き、やや速めに叩く。

ドン・ドン・ドン／＼＼＼＼

「御輿台」の芸は宮入り前・社殿前・まんだら橋・王橋・地蔵湯橋・駅前などで両日行っている。

また「手くばり太鼓」といつて位置について出発する際には一発ヘドンと叩く。「イヤサー」の掛け声で担ぐ。つぎにまたヘドン、「イヤサー」。つづいてヘドン「イヤサー」

ヘドン・ドン・ドン「ヨーイヤササーン」で進む、御輿太鼓の宮入りは勇みをかけて五・七回奇数で入ることになっている。鳥居の前でおろしズりで入り、石段の前では「手くばり太鼓」の要領で一発「ドン」を合図で担ぎ「イヤサ、イヤサー」の掛け声いさましく、御輿の前に着し大だんじりを待つ。

ヘドン・ドン・ドン

ヘドンデンドン・ドンデンドン

ヘドン・ドデン／＼＼＼＼

十一時三十分に宮入りを完了する。十五日宮遷し式終了後、神輿および稚子行列はまんだら湯へ向うが「御輿台」は宮居前の神前で敬意を現す意味で「肩入れ」の芸をするが、それにつづいて「ヤレサセ・ヤレサセ」といいながら台輪を手で支えながら高く差し上げる。「御輿台」の最高の芸で二日間の祭日でこの一回のみである。観衆の賞賛の拍手をうける。やがて鳥居を潜り、神輿のあとを追ってまんだら湯にいたる。

「静と動」太鼓一つを中心に、精神的に静の姿で神靈を守る御輿太鼓は「ヅシン・ヅシン」と腹の底にひびく、また三つの囃子物（大太鼓・小太鼓・半鉦）のハーモニーと変化にとも大だんじりの太鼓は、若衆の数による熱気とともに動きを感得させる。現在「みこし台」の太鼓上手は、福田忠雄・坂田幸次・藤田昌二・熊毛三夫・奥本晴太郎。

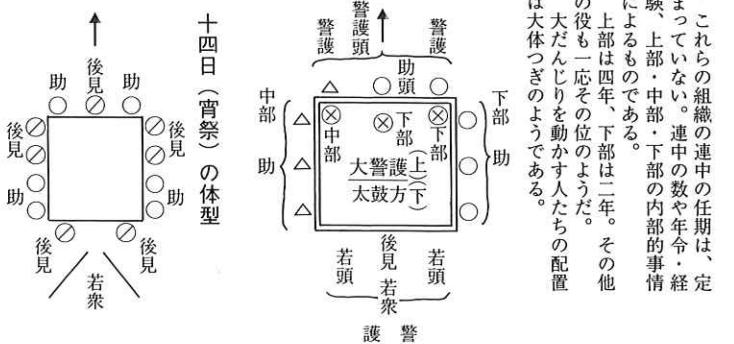
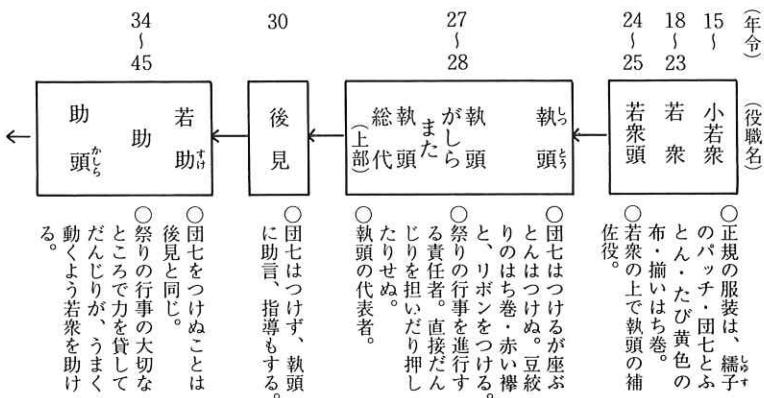
**だんじりを動かす人の組織** だんじりは多勢の人々の力で動かされるが、規則正しい動き方をするためにまた、危険を防止するためにもだんじり経験の年功による階級的な役割がきめられている。これらの組織職名・服装などにしても、一見極めて封建的で軍隊式なものに思われる。

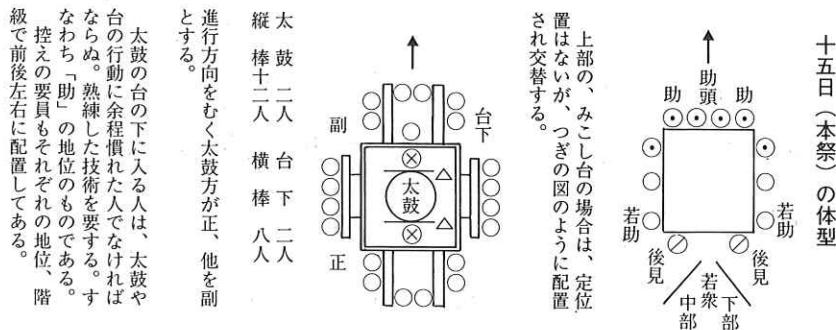
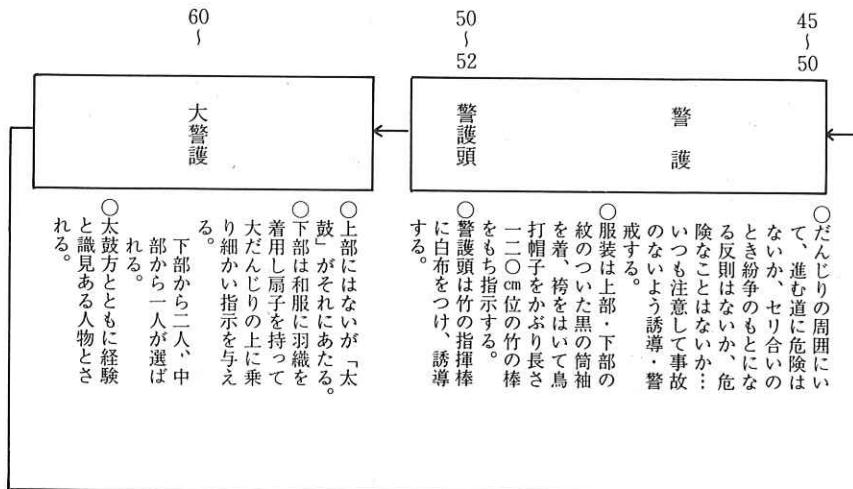
「連中宿」は封建社会における「若者宿」に相当し、社会的習慣や上下関係の築や広い智識を身につけ、集団生活の中で人間的成长を遂げる、そのよい機会としてとくに優先される場である。祭りが終了したあとの平常の生活においても、「連中」は仲よく交際し、冠婚葬祭にも肉親同様に掛け合いつき合う美風を、この土地に残している。だんじり組織の階級は、家柄・貧富・社会的地位の高低によらず、また知識や学歴にかかわらず、純粹にだんじりを動かす組織人としてのみの紐帶となっている。



写299 薬師橋での「セリ」

#### 第四節 秋のだんじり祭





進行方向をむく太鼓方が正、他を副とする。  
太鼓の台の下に入る人は、太鼓や台の行動に余程慣れの人でなければならぬ。熟練した技術を要する。すなわち「助」の地位のものである。控えの要員もそれぞれの地位、階級で前後左右に配置してある。

警護は下部と同じ年齢・経験をもつ人々であるが、下部に比しやや高年齢のようである。

上部の団七は以前はなかつたものであるが、昭和二十五年頃より逐次下部と同様の連中制度がとりいれられ組織化されるとともに、若衆には発案された意匠による団七を着用させて大幅な後継者づくりにとり組んだのである。

また上部の配置は下部のように地位階級によらない。「台」の構造から縦棒十二人は身長の高いもの、低い者は横棒に八人つき、階級や地位はその座布団や、はち巻きの色彩で区別するのみである。

#### ◇本住寺会議

(下部) 每年執頭が司会し、後見以上が本住寺に参集して「大警護」を選ぶ。

警護・警護頭にはかり、その年の大警護を下部より二人、中部より一人計三人を決定する。

十月九日から十一日までに執頭が案内口上と衣裳くばりをする。

#### 大警護への案内口上の例。

若頭三人で下部の提灯をさげ、着物に団七をきて参上し（十月九日・十日頃）

「このたびは來たる十月十四日・十五日の秋祭りに際しまして大警護様には大変ご苦労さまですが、よろしくお願いします。」このとき羽織と扇子を入れた箱を持参するが、扇子は記念として贈呈する。

十三日には三役執頭がしら・副執頭がしらが来て、「明日はご苦労さまですが、よろしくお願いします」と挨拶する。これを受ける大警護は、「このたびはお日がらもよく十四・十五日の祭りには、執頭さんと協力してよい祭りをしたいのでよろしくお願ひします。本日は大変ご苦労さまでした」と答辭を述べる。

大警護はだんじりの最高司令官であり、執頭の最上の相談役である。したがつていろいろの任務がある。

イ、輿かき人夫の不足の場合は、警護や執頭と相談して若衆を応援に出す。

口、喧嘩の仲裁役をする。

ハ、降雨のときの「せり」の中止などの決定、雨幕・雨幣などの指図をする。

ニ、「せり」の場合、けがをせぬため「助」に適切な注意を与える。

ホ、太鼓方と協力しつつ祭りが面白く運ぶよう全体に留意し指揮する。ヘ、「トッテンマングリ」(だんじりの回転)「かんぶり振り」などの指示。

ト、助頭以下を指導し、「せり」の采配をする。

このような力をもつ「大警護」は若い連中たちの羨望(せんぼう)的であり、家の名譽とされる。一日間の「だんじり祭り」は大警護中心に運ばれる感がある。

最近における大警護名はつぎの通りである。

昭和五十五年度

(下部) 宮下 義三

六浦 崇士

(中部) 立花 博司



写300 下部警護

第四節 秋のだんじり祭

				昭和五十六年度
(下部)	六浦	崇士		
(中部)	浅田	初男		
				昭和五十七年度
(下部)	生田	俊郎		
(中部)	浅田	初男		
				昭和五十八年度
(下部)	小関	正次		
(中部)	田路	直人		
				昭和五十九年度
(下部)	小関	正次		
(中部)	田路	直人		
				昭和六十一年度
(下部)	大井	義雄		
(中部)	三宅	元彦		
				昭和六十一年度
(下部)	大井	義雄		
(中部)	三宅	元彦		
				昭和六十一年度
(下部)	早川	徳一		
				徳一
				駒井
				盛雄



写301 上部警護

## (中部) 竹田 功

◇蓮成寺会議 本住寺会議と同様に上部でもこの会議がもたれ、祭りについての打ち合わせとして、重要な伝達事項や役割についての人名の確認等、あらゆる準備的な話し合いと具体的な用意がなされる。

だんじり祭り 秋まつりの行事は、十月十四日の宵祭りと翌十五日の本祭りの二日間行われるが、それまでの順序、次第 にいろいろな準備がなされる。

まず四所神社の氏子総代で秋祭りの執行についての打合わせが行われ、それから上・中・下部のそれぞれ警護や執頭などおもだつた役の人々が集つて（近年交通事情が変り警察関係の人も加わる）、神輿を中心とした祭りの行事の協議がなされる。また各町内会では稚子や輿かき、それに神輿の経費のことなどが相談される。

なお十月に近づくや執頭は毎夜連中の定宿に集つて、その準備や打合わせがすすめられ、それとともに太鼓を毎晩叩いて皮をよく慣し、また叩く練習がつづけられ一日一日と晴の日を待つ。この頃になると町の人達も男女老若を問わず、祭りの関心がたかまり当日を心待ちする。

つぎに一年間放置していただんじりの整備として、金具を磨いたり掃除をして汚れを淨め、車やあちこちの箇所を調べて、一日間故障なく動くように入念な点検が行われる。まだだんじりの屋根につける真白な御幣は、毎年新しい紙で作りかえるが、この作業を「御幣さばき」という。ただし上部の小だんじりは一年目ごとに御幣さばきをする。また御輿台は金幣であるのでその必要はない。

それからまた警護の人達に挨拶をしてその衣裳を配つて歩く。

つぎに上部の御輿台は縦棒をはずしてしまるので、祭りの前日に「棒がらみ」といって縦棒を台にしつかり

麻縄でくくりつける作業をするが、これはなかなか技術のいるものである。大太鼓も動搖せぬよう四方をわら草履でしっかりと固定する。

下部では「ハンマー合わせ」といって、四年目ごとに新調する車（松の車輪）や金具を整備する作業があり、電線上げ、柳の枝切りなどをして、だんじりの屋根の御幣がつかえぬように細かい注意をし、また「せり」の場合に車がスリップせぬための歯止め木を作ったり、夕方に使う笹竹や提灯も数多く準備される。

これらの諸準備はすべて執頭が中心となり若衆が行い、祭りのいろいろな仕きたりを覚えるのである。

城崎の秋まつり、すなわち「だんじり祭り」は、四所神社の神輿の巡幸を中心としたその動きについて上部の「みこし台」が動き、その両者の動きにつれて下部の「大だんじり」が動くのが原則となっている。十四日の宵祭りには神輿は出ない。「だんじり」のみ日程表によつてそれぞれ行動する。

カミは宮居深く鎮まりましてハレの日を待機し十五日の「みやうつし式」後、はじめて神輿が中心となつて行動が開始される。

下部では、十三日午前七時にハンマー合わせがあり午後七時から本住寺で御幣さばきがある。

十四日は早期六時に四所神社へ御幣を持って行き安全無事の祈願をする。

「だんじり飾り」は十四日の早朝から執頭宿で太鼓のとりつけ・幕つり・御幣かけ等を行い出動を待つ。幕は上部のみこし台は牡丹に唐獅子、小だんじりは虎に竹であり、下部の大だんじりは雌雄の向い竜と鳳凰が刺繡されている。

十四日午後二時ごろから、どちらのだんじりも宿を出発して行動にうつる。大だんじりは前述のとおり十四

日十二時半、中部に引渡しその晩は宮前に停泊し、十五日朝九時下部に引継ぎを行い、いよいよ本祭りにはいる。一方、みこし台は薬師橋を渡り山門の前で出をまつてゐる。

つぎに小だんじりの運営については「下・中部檀尻世話人会」のすべて手ぬかりのない準備・手配がなされてゐる。

上部の小檀尻は震災前のもので、当時の狭い道と人口に合わせて造られ軽く小ぶりである。それに上部の小檀尻は上・下の大だんじりの間に入つて、喧嘩の出来ないよう歯止めの役をつとめる。大きいセリの場合は大人が加勢し中に入り、みこし台と行動をともにする。

また下部の小檀尻は特別な祭りの行事の中での役はなく「セリ」の場合いつも双方の邪魔にならぬ場所に止めおかれる。なお中・上・下部の檀尻運行予定を示すと、

◇「中部檀尻青年行事予定表」

(昭和六十年度)

十月三日

氏子総代会

五日

太鼓鳴り初め

六日

後見以上会議

七日

若衆寄せ

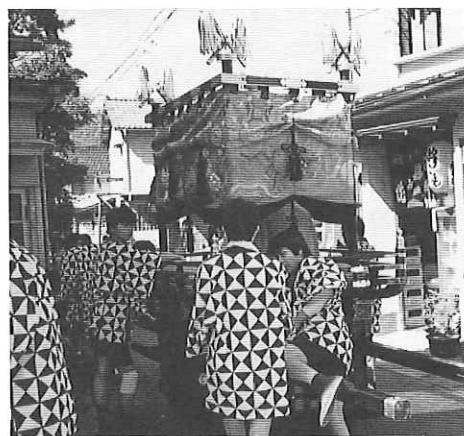


写302 御輿警護

第四節 秋のだんじり祭

17時10分	16時40分	16時10分	15時30分	14時40分	14時20分	13時40分	13時20分	7時
宿 帰着	王橋着（せり）	今津発 王橋へ	地蔵湯橋 駅前 今津	王橋 地蔵湯橋（せり）	薬師橋発 宿へ	宿発 薬師橋へ	全員集合	若衆集合 台 飾り付け

◇昭和60年度 秋祭上部行程表  
10月14日



写303 桃島の御輿台

							10月15日
14時50分	台発 神輿 弁天社発御	（休憩）	13時30分	宿発 王橋 はなや前	12時30分	まんだら橋（せり）	12時00分 神輿発御 台発
14時20分	台発 地蔵湯橋（せり）駅前へ		12時40分	神輿発御 台 発中学校	11時25分	宮入り完了	10時40分 宿発 宮へ
			13時	（せり）	10時30分	全員集合	10時10分 薬師橋発宿へ
			30分		9時30分	若衆集合 台 飾り付け	8時30分 全員集合
					9時30分	宿発 薬師橋へ	10時00分 大檀尻 薬師橋着

グランドホテルをへて宿へ



写304 一の湯 王橋をねる御輿

第四節 秋のだんじり祭

15時20分	きくや發 新地へ〔憩〕
16時40分	新地發 王橋へ
16時50分	王橋（せり）
18時	神輿還御
18時30分	宿 帰着
14日（宵 宮）	◇昭和六十年度 大檀尻順序 下部執頭
8時	全員集合 宿發
9時	宿發（南） 王橋（北） 駅宿
9時40分	宿發（南） 王橋（北） 新地 地蔵湯 駅 マルヤス
10時40分	小林屋（北） 地蔵湯 大谷橋 宿
11時40分	（昼 食）
12時10分	宿發（南） 王橋（北） 駅宿
12時30分	宿發（志のや前一度顔出し）（北）より（南） 中部
13時20分	三宅氏へ へ
12時	中部へ引渡し完了
11時30分	中部へ
10時20分	三宅氏へ



写305 下部宮入り

13時40分	宿発	薬師橋へ
14時	薬師橋へ到着（セリ）	
14時10分	薬師橋発	中学校へ 中学校発
15時20分	地蔵湯橋（セリ）	谷田屋付近にて休憩
15時30分	王橋（セリ）	南側 地蔵湯 中部へ
15日（本祭）	駅宿	北側
8時30分	全員集合	
9時	中部より引継ぎ完了	
9時10分	宿発 大谷町	秋葉神社へ
10時	薬師橋へ至る 後	中学校 後 [昼食]
10時50分	集合宿発 宮入り出発	
11時40分	宮入り完了	
11時50分	神輿渡御前 四所神社出発	南側 地蔵湯
12時30分	まんだら橋到着（セリ）	
12時50分	まんだら橋発 中学校へ	
14時40分	神輿 弁天社発御	



写306 上部宮入り

王橋へいたる北側へ 台 はなや前 〔休憩〕（示威運動）

地蔵湯橋（セリ） 新地 山県屋付近休憩

神輿新地へ 台 新地へ入れば一の湯前より南側 小林屋前

16時20分 王橋へ（セリ）

17時30分 神輿 王橋より 神社へ還御

◇小檀尻世話人会 伝統ある城崎の秋祭りに対する情熱と子供たちへの愛情から、警護の任期を終えた連中の人々が出務奉仕されているもので、その趣意書にも自主的発露なるものがうかがえる。小檀尻が大檀尻とともにいよいよ隆盛で後世に継承されることを心から願っている。そのことに努力されている多くの方々に深く感謝と敬意を表したい。

昭和五十四年十月四日の下・中部小檀尻世話人として左記の内容の注意書が廻覧されている。

恒例の秋祭りが近づいて参りました。

城崎の秋祭りは申すまでもなく、町民の方はもとより、但馬各地の人々も楽しみにしておられる有名な祭典の行事であると思います。町内の子供達は楽しみに待っています。

幸い小檀尻の運営については、大檀尻関係者各位の子供達に対する愛情と、小檀尻運営諸般に御理解戴きまして小檀尻に応援願つており、小檀尻世話人としても感謝致しています。

永い伝統の上に立つて、後世に引継がれるよう努力致し度く存じます。

最近の自動車等の運行と、道路事情に対応する小檀尻の安全と運行の面については、取締当局から厳重

なる注意を受けています。世話人とて義務のみで出務するのではなく、秋祭りに対する情熱と子供達への愛情から出務奉仕致しています。出来得る限りの御世話は致し度く存じますが、全ての責任を持つものでない事を御諒承戴き度く存じます。

不幸にして事故等が発生致しましたら、今後出務奉仕する事は出来ず、又小檀尻は子供達と共に秋祭りの行事に参加出来なくなると存じます。

伝統ある城崎の秋祭りに、大檀尻共々に小檀尻が愈々隆盛に引継がれる様、皆様の深い御理解と御協力を戴きまして、十四・十五両日の祭典行事を恙がなく過さして戴く様、格別の御支援の程、お願ひ申し上げます。

小檀尻に出られる子供さん、小檀尻に乗られる子供さんについては、左記事項に充分御注意戴き度く存じます。

一、檀尻に出られる子供さんは、世話人の指示に良く従つて下さい。嬉しさの余り勝手に走り廻る事のない様、よく注意しておいて下さい。

二、檀尻の陰等から飛び出す子供さんが多いので、特に注意しておいて下さい。

三、檀尻を押す子供さんも、乗られる子供さんも、胸に名前等を書いた布を縫いつけて下さい。

四、檀尻に乗せる人數を制限致しますので、交代まで無理を云わないで戴く様、お願い致します。

五、交通量の多い場所には巡回出来かねる事がありますので、その点についても予め御諒承下さい。

六、団七を着ていな子供さんと、女の子供さんは乗つて戴けませんので、御遠慮下さる様、お願い致し

#### 第四節 秋のだんじり祭

ます。

七、下部、中部地区以外の子供さんは御遠慮下さい。

団七用布名札

電話番号	名前

昭和五十四年十月十四日

下中部小櫛尻世話人会

代表 三木 祥一

山田 鉄一

祭りの主体である四所神社は、すでに述べた通り江戸時代の初めころから温泉寺の法灯旺さかんとなるにつれて次第に記録が現れてくる。すなわち、十七世紀後半から十八世紀中ごろにかけてである。

江戸時代でも「元禄時代」は社会生活が一般的に華美となり贅沢をきわめた。文化・文物・文芸・文学・芸術等全般にわたり著しく進歩した。とくに政治の支配階級たる武士を上回る財政的に商人の興隆をみ、豪勢な生活をした時代である。農民や工人もみな同様であった。生活の一部たる「祭り」についても、信仰心がうす

れてきて物見遊山やリクリエーション的になり諸社寺の祭祀や法会も観光化し、つとめて祭りを楽しむようになった。

日本三大祭りといわれる大阪の天神祭・京都の祇園祭・東京の神田祭も、当時の町人社会における「まつり」であることは第一節で述べた。

城崎の秋まつりの御輿がまず造られ、ついでみこし台が、翌年大だんじりが造られた起源を文献によつて歴史的に調べてみても、それが町人文化の興隆期に合致しているのである。

「但馬の湯」として名声をあげ、直接京・大坂の上方の文化と接し交流を結んだ城崎温泉に、いまのような歴史と伝統ある祭礼と「だんじり祭」が伝承されていることは別に異とすることではなさそうだ。

前述したように温泉寺の多宝塔の下に置かれていた御輿は、祭日が近づくと觀音堂（本堂）の内陣の前におろされそこで飾り付けをし、祭り当日に内陣から段々の坂みちを担われて四所神社に移動された。

このように坂を上り下りするのに、ない棒が必要となる。御輿に似せてつくる「みこし台」は、はじめは御輿を乗せる台として成立したものであろうか。すなわち上部の「みこし台」は移動のため「かつぎだんじり」の形式に発展したようである。

うるし塗りの美麗な段尻・四本柱の金幣・高欄付き・縦棒・横棒の形態である「みこし台」は円山川下流域いわゆる内川地域一帯にみられる。たとえば下鶴井・赤石・二見・飯谷・来日・畠上・桃島・小島・瀬戸・津居山・気比等に分布している。

これらは恐らく湯島のみこし台を真似たものと思われる。



写307 祭りの見どころ 一の湯王橋のセリ

豊岡付近では白木づくりで小ぶりの「だんじり太鼓」が多く、いわゆる「けんかだんじり」といつて、激突して破壊し合うもので実に殺伐である。町内会ごとの運営であり、上区女代神社と下区小田井・日吉神社の氏子中心の集団で争うようだ。

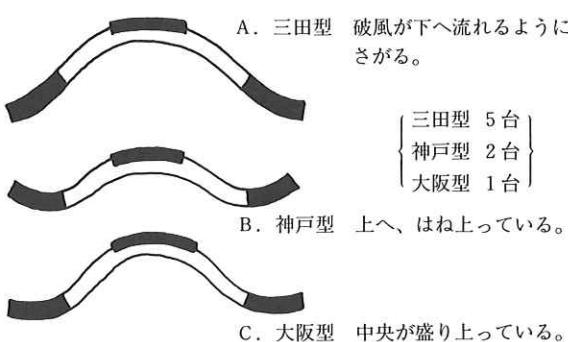
湯島のだんじりのように神事の一環として行う「だんじり祭」ではない。カミの座たる神輿に供奉しその警護にあたる「みこし太鼓」ではなくて、本当の娯楽的意味のものに過ぎない。構造や素材も粗雑であり技術的に劣るもので、城崎のそれと彼我比較にならぬ。

城崎の「みこし台」は、幕は牡丹に唐獅子を刺繡したもので、猩々幕や錦幕とともに美術的な価値あるものである。金幣が輝き高欄金具の光り、四本柱をはじめ紅や黒の漆の美しさ、すべて京風の趣きであり、竹田祭・播州なだ祭に代表される「ふとんだんじり」「みこしだんじり」とは異なる型といえる。

つぎに下部の「大だんじり」について考えてみよう。この形式の「屋台檀尻」はこの地方に類をみぬものでわずかに久美浜町にこの形式で小ぶりのものをみる。

思うに城崎は円山川下流一帯がいまから二五〇年前、享保十九年（一七三四）に豊岡藩をはなれて以来明治まで一二三年間、久美浜代官の支配地であり政治的に関連の深い土地となつてゐる。

図51 〈だんじりの屋根の形式〉



したがつてだんじりの構造上の類似性もそのへんにあるかも知れない。

さて大だんじりの構造上の特徴は、

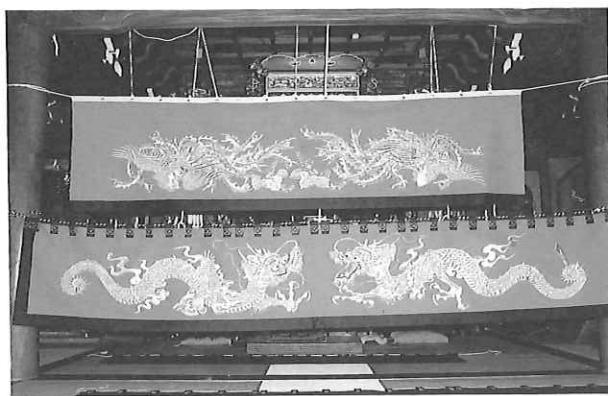
(一)、唐破風形式で男屋根・女屋根の二段になつてゐる。屋根の中央が盛り上り両端はね上がつてゐる形は大阪型だんじりに共通している。

この形式は摂津・河内・和泉の大坂府下、兵庫県下の尼崎・西の宮・三田・神戸灘区に分布してゐるもので、神社建築の「權現造り」をとりいれた形式を使つてゐる。

しかも飾り物として、鬼板・懸魚(拜懸魚と降懸魚)・鳥衾ホシマや葺地・虹染組勾欄・箱棟・唐破風・格子・飛檐檼木・化粧檼木・桁かしく地覆・前中後柱および土呂台等々建築用語の共通性をみられる。『河内

名所図会』を見れば城崎だんじりによく似てゐるのに驚く。

「車樂は河内國誉田八幡祭りはじめなり。大阪の車樂は数多し、とくに東堀十二浜の車樂は錦繡をひき美麗をつくし生土の町々を囃しつれて牽きめぐるなり。これ大阪名物のその一品なるべし……」とあり、また『夏祭車樂囃子図』には牽くさまが描かれてある。これによると太鼓は下の格子の部分にある。ただ挺子を用いて制動をかけていることがみられる。



写308 下部大だんじりの幕（上 凤凰の幕・下 龍の幕）

(二)、車はいわゆるコマとか、ハンマーと称する大きさ、直径（一尺七寸×一尺）松材を削り抜いたものである。そして車は土台の内側におさまる。この形式は山車形式と違つてだんじりの語源たる地面をにじる、きしる（轆、軋）感じを与える。昔、舗装されぬ土の道また狭い土地で松材も豊かな土地に移入された「だんじり」であろう。

土呂台、ハンマーから古代の運搬具たる修羅が、地車のルーツではないかとの説をなす人もあるぐらいで、「ハンマー合わせ」はだんじりの極めて大切な準備の一つとされるのもうなづける。

幕は二匹の雌雄の向き合つた「龍」の刺繡である。龍は中国で空とぶ想像上の動物で、雲をおこし雨を降らせるという。また後幕は「鳳凰」である。黒幕の下に見え隠れする姿は美しい。これもまた中国ではめでたいときに出るとされる鳥である。古来わが国では「牡丹に唐獅子」「竹に虎」「昇天の龍」「雲龍」「龍虎の争い」等の言葉がある。桃山時代から江戸時代、武家建築や書院造り、寺院建築に狩野派の人達により障壁画として描かれる図柄によく用いられてきた。雄渾と闊達と勇気がみなぎる。

以上を要約すると上部の「みこし台」はおそらく城崎独特のだんじりといえるのではないか。そして湯島の山間の村に適った段尻でもあ

る。

下部の「大だんじり」は大阪方面から移入したものを基礎に、若干土地の事情を考慮し工夫をこらしたものと思われる。昔から大坂や京は湯嶋人のあこがれの土地で、また出稼地でもあったが、この大坂人の気風を直輸入したものであろう。風俗の上でもそれがあらわれ、だんじり若衆の「団七姿」もその一つである。歌舞伎芝居の有名な「夏祭浪速鑑」の団七の装いのような若衆のいきなスタイル、黒儒子のものひき、紺の足袋をうこんの布でしばった姿は美しい。ちりめんの座布団を二つ折りにして両肩から首にくくりつけ、きらびやかな地車、台をゆり動かしながら繰りひろげる豪華な大絵巻こそ秋のだんじり祭りの圧巻であろう。

当四所神社の宮入りから一の湯までの「セリ」におけるだんじりの迫真的な動作には誰しも熱気を感じる。  
御幣納め

二日間にわたるハレの日が終り町は元どおり静かになる。若衆たちは各自自らの連中宿に帰るのであるが、下・中部では幕等一応の片づけを済ませた後、駅通りのトヨダマーケット前を出発点として各連中順序に整列し、大小だんじりの屋根につけてあつた六本の御幣を、伊勢音頭とそれに太鼓・半鉦のリズムに合わせて、一せいに上下、左右に振りながら、伍をなし威風堂々四所神社へ向う。この「御幣納め」という行事が最終的に行われる所以である。これぞ一大デモンストレーションというべきか、また閉会式と見るべきか。

総指揮者だった大だんじりの大警護三人を先頭に、街中をこだます伊勢音頭「ササヤートコセーヨーイヤナ」に合わせて、六本の白い御幣が勢いよく高々と振られていく。町は再び活気づき見物人でざわめく。これら音頭と鉦・太鼓のひびきの中で躍動するこの隊列は一時間程か

かつて中の町に入りさらに宮へ近づくや、一挙に半鉢と太鼓の連打を合図に早駆けとなり、喚声をあげて宮の社前に殺到し神主・宮総代に御幣を渡す。そこで全員万歳を三唱し、これで祭典の幕が閉じられるのであるが、この行事は大だんじりが神への無礼のお詫びだという説もある。その夜はそれぞれの連中宿で慰労の宴が盛大に行われ、だんじり祭りの余韻を楽しみつつ夜が更ける。

**御幣ふり** さて、この御幣納めの「御幣ふり」はなかなかむずかしいもので、伊勢音頭も美声だけでなく、だんじり特有の勇壮な格調高いものでなければならないし、なお御幣ふりに合わせるのが骨こうとされる。それには幣ふりの仕草動作とその上に若衆の「ヨイヨイ」の掛け声にも留意せねばならぬ。年一度のこの行事も熟練の要るものである。

◇伊勢音頭

一、芽出た 芽出たが 「ヨイヨイ」

三ツ重なりて 「ヨイセ・トコセ」

鶴が御門に

巣をかけた

二、伊勢に 七たび 「ヨイヨイ」

熊野に三度 「ヨイセ・トコセ」

愛宕山には

月参り



写309 御幣

三、芽出た 芽出たで 「ヨイヨイ」

若松さまハ 「ヨイセ・トコセ」

枝も栄えて

葉も繁る

四、伊勢は 津でもつ 「ヨイヨイ」

津は伊勢でもつ 「ヨイセ・トコセ」

尾張名古屋は

城でもつ

五、坂は 照る照る 「ヨイヨイ」

鈴鹿は曇る 「ヨイセ・トコセ」

愛の土山

雨となる

六、伊勢に 参るなら 「ヨイヨイ」

十二夜さんに 「ヨイセ・トコセ」

共に白髪の

生えるまで

▽大檀尻「御幣納めの基本順序」

十五日 午後七時より  
駅前通りより

四所神社に納め

万歳三唱で終了する。

先頭

下部執頭がしら、中部執頭がしら、

(提灯)

下部大警護二人

中部大警護一人

下部警護頭十人

下部助頭六人

中部警護頭六人

(大檀尻一番幣)

(大檀尻小太鼓)

下部若衆連中

（大檀尻二番幣）

中部後見

（大檀尻大太鼓）

中部若衆連中

（若頭の次の連中）



写310 御幣納め

16	15	14	13	12	11	10	9
 (小檀尻半鉦) 中部若衆連中 (四番目の連中)	 (小檀尻三番鉦) 中部若頭 (若衆一番目の連中)	 (小檀尻二番鉦) 下部若頭 (若衆連中の一番目)	 (小檀尻大太鼓) 下部若連中 (四番目の連中)	 (小檀尻小太鼓) 中部若衆連中 (三番目の連中)	 (小檀尻一番幣) 中部執頭 (連中)	 (大檀尻半鉦) 下部若衆連中 (三番目の連中)	 (大檀尻三番幣) 下部執頭 (連中)

◇御幣について そもそも祭りの本義は、神靈をよび迎え、これに献供し待座して神靈を慰め和ましめ、神人和合の実をあげることにある。神靈の降臨するさいに何かを媒体とすることにより人間の世界に臨む。この媒体となるものを「依代」とよぶ。

神籠・磐座・神奈備・御神木・森・杜である。榦・門松・飾り花・斎刺串・削りかけ等々みな神の依代である。麻や紙の白い御幣も同じである。

前記した通り祭りの主旨が神意を慰め和やかしめるにあるならば、人がつくり得る最高の価のもの、財物などを贈り、神の喜びを得ようとするることは当然である。その財物の一つが布帛であった。食物とともに衣服を奉ることが古くからの神事にある。

「御幣」のことを古語で「ユウシデ」というが、「ユウ」は「木綿」という字を当てるように、古い時代には繊維すなわち麻に類した布帛であった。「シデ」は標識の意をもつものである。

また古典に幣を「ヌサ」とか「ニギテマイ」などとしているが、「ニギテ」も「ニギタエ」も（和榜）で楮の繊維で織った布をさしていることからも財物の意がうかがえる。したがって古くは棒に布帛あるいは麻などの繊維の束をとりつけたのであった。

「御幣」の紙も、この布帛の変形であり神のみ心をひくように、美しく清らかに作り得る価の尊い紙が用いられるようになった。この紙にも神への捧げものの意がこめられたのである。だが紙の御幣がひろまつてもなお前代の風は随所に遺り、奈良県磯城郡の村々の奉幣行事には御幣に稻穂とヘイフングリが釣らされる。フングリは洗米を白紙に包み芋かうじか水引でしばつたもので、財物の一つで食物を意味する。また逆に紙の御幣が前



写311 地蔵湯橋のセリ

代の依代に影響を与え、榊の枝に幣紙をつけることも一般化した。

「御幣」はまた「ミテグラ」とも呼ばれた。ミテは御手、グラは神の座の意味で明らかに神靈の依代・神座である。そこに靈妙な威力ありとされ、これを以つてよからぬものを払うことができると考えられる。のちの「御幣」は主として祓の道具のように意味されるようになつた。

しかしながらお神靈を移すようなさいは、ミテグラたる御幣が用いられ、神幸にも神座として渡御する風はなお濃厚に残つてゐる。

神宝・神体として祭りの行列に、「ホコ」と名づけられたものもよく出る。「鉢」は古代からの武器だが、りっぱな飾り物になるからというよりもその形が幣串、すなわち「御幣の芯」になる木の棒と共通しているからではないか。御幣も神座の木として芯の棒に意味があり、鉢もそれと同様であろう。神樂歌に神がかりの状態に入るためには必要な持物を「採物」と総称し九種をあげている。

——榊・幣・祓・篠・弓・劍・鉢・杓・葛——。

御幣の意義をこのように理解するとき、二日間にわたり、だんじりの屋根すなわち頭にミテグラをいただき、御祓いを受けつつ神幸にしたがい、無事に祭りの終了したことを感謝する意味で、財物の一つたる「御幣」を四所神社に納める意味はまことに深いものといわねばな

らぬ。めでたい伊勢音頭に合わせ若衆達の健康と多幸を「カミ」に祈りながら「御幣納め」は終るのである。この御幣の紙片を持ち帰りタンスの中に入れておけば虫がつかぬ、とのいい伝えが昔からある。

## 第五節 祭りの伝統と時代の調和

### 市街の膨張 と上・下

祭りは古代から私たち祖先が、カミをまつらう行事であつて、その土地土地でいろいろな伝統と歴史をもつてゐる。しかしながら時代の移り変りとともに住む人々の生活の変化や、村の発展するなかで政治・経済・文化・交通・思想の変転とともに、まつりの行事もいろいろと變っていく。城崎の「まつり」についても、祭りと檀尻の歴史を探ろうとしても、なおわからぬ点が多い。なぜならば中世以来温泉寺別当が、四所神社の祭りを執行した、との伝えはあるが、温泉寺の古文書によつても、中世以前のことははつきりしない。記録のすべては江戸時代に入つてからのものである。

「御輿」は享保九年（一七二四）に奥口氏子により寄進、その後四十年たち明和元年（一七六四）に「台」

が、つぎの年に「大だんじり」がつくられたとの記録があるが、いまから二百二十年前のことである。すなわち行事として「だんじり祭」が成立した年代であつて、それ以来連綿として「だんじり祭」がつづいたのであらうか疑問であり、まして当初の行事の順序やだんじりの原型が、いかなるものであったかは知られていない。当時の湯嶋村は「町長く二つに切れ中に野をへだてたり…」とあるように、宮畷によつて二つに分れていた。○中の町にはもと本住寺と蓮成寺の二カ寺が建つていたが、寛政九年（一七九七）現在地に移つてゐる。

○天明・天保の大飢饉には旅館は二十軒余りに減じ、なお不況がつづき死者も出た。

○「大だんじり」のできた年、四所神社のお旅所を弁天山麓においた。それまでは村端にあつた次郎兵衛塚に仮小屋を設け使用していた。(いまの「スープーワダ」)

○享保十八年(一七三三)の河合草堺著『但馬湯嶋道之記』には「下の湯温泉の左右皆客舎なり、よき家十軒ばかりその他小家なり」と述べ、上の湯にはまだよい旅館はなかつたようだ。

○湯嶋の戸数は江戸時代より明治二十年頃までは、ほとんど三百戸内外であつたことは記録に明らかである。

川沿いの狭い平野に細長い集落が発展した。

右のように薬研の底のような狭い細長いムラにすぎたる「だんじり祭」が二百年前からつづいていること、および優美華麗で生粋で秩序ある制度・組織の下に、自治的運営がなされてきたことは一つの不思議であり、謎といわねばならぬ。この歴史と伝統のある城崎だんじり祭りも、いまや時代との調和の保てぬ問題が出現した。すなわち上部・下部・中部の領内、区分変更の問題である、戦後間もない昭和二十四年上部の執頭「まんだらや(石田弘連中)から、このままでは上部の「台」は人員不足のため運営ができなくなるというのが、当時申し出の理由であるが、これは氏子総代からは権限外のことであるとして受けられず、とくに下部大だんじりの元老達からは猛烈な反対があつて、話は不成功に終つた。

上と下の人口比は二対一か七対三、位であろうが、結局この問題は、上部に縁のつながる人々に了解を得て上部に入つて「台」をかついてもらうことと、だんじりを持たない今津区に働きかけて、上部連中へ永久加入

をしてもらうなどの増員方法で、一応解決した。のことなど「だんじり祭」に関しては区域的なものでなく、若衆やそれをとりまく家族や、地域住民の意識の問題として、杓子定規にはいかないことを物語つていてる。

#### ◇クルマ時代とだんじり祭り

いまや交通地獄とさえいわれ、クルマが街を頻繁に横行するとき、「だんじり祭り」のための交通規制や一方通行などは、街に出はいりの観光客にも不便をかけ、取り締り当局にも増員配置の迷惑をかけるのみならず、祭りの進行 자체にも危険性が伴うなど、伝統と時代との調和の問題は、なお一層深刻になつていくだろう。

#### ◇若衆と警護人数のバランス問題

下部にその例をとると、若衆一〇〇人にたいし後見・助・警護クラスが一〇〇人といわれる。

そもそもだんじり祭りは、執頭を中心とした若衆連を核とすべきが本旨と思われるが、後見・助でだんじりが運行され、過大と見られる人数の警護にかこまれている姿である。伝統の尊重と民主的社会の形成（地域づくり）とは、自ら区別すべき反省点にたつて、五十歳過ぎてもだんじりの運営に關係するのはどうかと「年齢制限」を唱える人もある。

#### 階級組織と 氏子制度

だんじりを動かす組織の項で述べたが、城崎の「だんじり祭」は小若・若衆・若衆頭・執頭とその青年期をつとめ、連中宿ですごすことにより、連帶意識のうちに自然な愛着と興味もわき、なお人生の意義をもたらすのである。とくにだんじり太鼓を自ら叩くことで、さらにその度合を強めるものである。近年とくに警護が多くなった感じで、その中には警護たる役目も十分わからぬ人が多いといわれる。それはだんじり組織の階級をふまず中年になつて連中に加わった人々が増えたからだと、いわゆるだんじりが組

織で動くものである以上、その中の人々はあくまで熟達した屈指の強兵でなければならない。

上部では「みこし太鼓」にのぼる人の養成を急務としている。台下に入る人についても毎年協議されるが後継者についてはなかなか難しい問題がある。

神道も仏教もキリスト教も信仰の自由は憲法の定めるところである。秋まつりは四所神社の神座、御神体を奉じて巡幸する行事にみこし台が供奉し、大だんじりが協賛する神事である。

土地の繁栄と個々の住民の息災安穩を祈念し氏子らが鎮守神に仕え廻くものである。しばしば述べてきたとおりに「カミと祭り」の本質にかえるとき「氏子制度」が問題となる。だんじり祭りが観光的になり、リクリエーション化していることにあるが、同時に町民が氏神と氏子の関係意識に欠けていることもいなめない事実であろう。四所神社の経費は現在町内会に神社係があり神社費として徴収される。祭典・營繕・人件費等もそれによりまかなわれる仕組みである。

## 第六節 余録

### 御幣さばき

御幣さばきは過去三十年、柳町の井本一郎氏に委嘱していたが、昭和五十四年から大谷町の大

井武司氏があたることとなつた。

十三日の夜、若衆頭達が手伝つて七時半から本住寺で行うのが慣習である。

御幣の紙については豊岡の浮田幸栄堂に注文する。純楮紙で縦四二・五七センチ横五一・〇センチで一枚

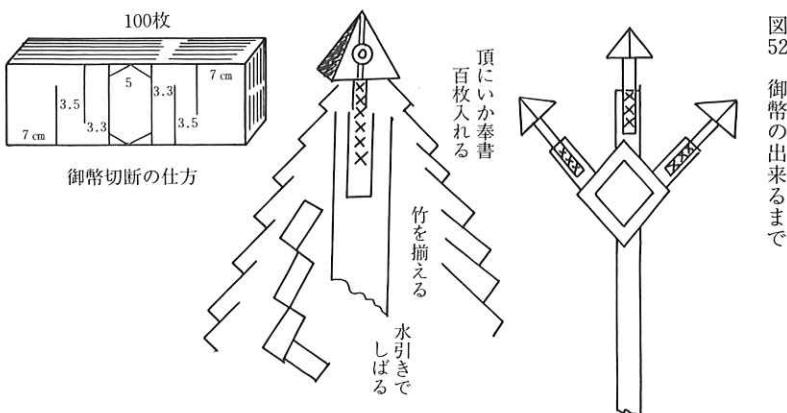


図52 御幣の出来るまで

五十円程度二千枚を必要とし、その経費は約十萬円という。すなわち一本の御幣で三〇〇枚六本だから一八〇〇枚いる。

大井氏の話では「百枚を鑄<sup>のみ</sup>で図のように切断するがなかなか技術を要し難しい」と。出来上った御幣は十四日早朝六時に四所神社で祈禱を受ける。

若衆の正服は団七

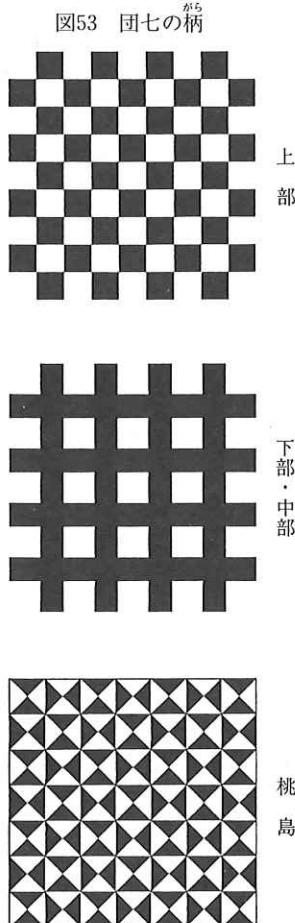
団七は小若・若衆から執頭まで必ず着用することとなつてゐる。団七を着てゐるのは相手方のだんじりの勾欄には絶対にさわらぬことが掟<sup>おきて</sup>とされている。「セリ」の場合、後見以上はこの限りでない。執頭は上部・下部とも赤い檻<sup>はなわ</sup>をかけ、リボンをつけて区別される。元禄時代の歌舞伎役者の伊達姿の流行から來たものだろうとの説がある。連中を区別し肩に当てる「ふとん」は近年きわめてカラフルになつてきた。

団七を着て、しゆすのパッチをはき紺たびをうこんの布でしばる。肩にざぶとんをかけるのが一般の服装であるが、近年揃いの色シャツとそろいのふとんで連中を区別することが流行してゐる。ここにも時代の移り変りを感じがする。

「だん七」の模様は上部と下・中部それに桃島のだんじりで異なる。

古老の話では上部は以前いまのような「団七」ではなく一見、車夫風な感じの股引き姿であったという。

図53 団七の柄



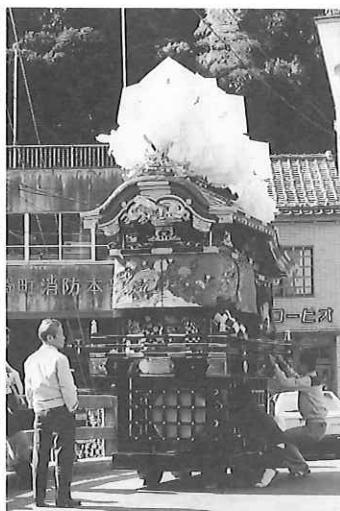
湯の祈禱と巡幸がつづき、温泉発見の地といわれる、まんだら湯で祈禱が行われる。温泉発祥地といわれ聖地とされる場所である。このまんだら橋をはさんでだんじりの競り<sup>せ</sup>が行われる。下部だんじりはこの橋を渡れぬことが「掟」とされている。

縁起・伝説によれば養老元年(七一七)四所明神の靈夢によつて道智上人が加持祈禱された場所であるといわれ、温泉の発見は四所明神のカミの靈夢によるとの伝承がある。

聖地だから下部の大だんじりは橋を越してはならぬという。これは「だんじり祭り」をにぎやかにするべく「せり」を楽しむための一つのたてではなかろうか。



写313 下部小檀尻



写312 上部小檀尻

弁天さん  
の御旅所

『温泉寺縁起』では本尊を觀の浦から最初にまつった場所が「児島」であり、俗に「神樂丘」また「弁天山」と呼ばれ昔から村人に聖地とされている。ここにだんじり祭りの神輿の御旅所を置いたことはすでに述べている。神輿のお旅所は氏子たちの要所とされる。昔、弁天さんは字、児島とも称し湯島村の端に位置し水神・川濯・川みそぎが抜戸神として尊敬され、民俗的に神まつりの御旅所の聖地とされたと考えられること。

#### 小だんじり

下部の「小だんじり」は重いとの定評がある。それは現在の大だんじりや上部の小だんじりに比べてであるが、この小だんじりは元、大だんじりとして造られたものであるが、古くなつて大だんじりを新調した際に国府村土居に売却した。土居では十分使用することなしにしまつたまま年月が経つた。その後北但大震災で下部のだんじりは小屋もろとも焼失した。

昭和七年震災復興も一段落した頃、だんじり祭りに熱心な有志が発起して、前（土居）のだんじりを薪木値段（目方貫々）で買い戻しに成功し、だんじりを砂利舟に乗せ川

を下り駅裏の三本松に着け陸上げをした。このだんじりがなかなか動かぬので大谷町の秋葉社、宮本町の堀端稻荷社の太鼓を叩いて威勢をつけ押し帰つたものだと古老は語つてゐる。その後新しいだんじりを造ろうと寄付を募り、谷馬の大工小屋で在町大工総がかりで現在の大だんじりが完成した。(当時大工手間一円三十銭)昭和九年の秋まつりにはじめて復興をみた。龍の幕は昔の写真を参考にして丸紅に注文し三宅松子(いたや)の寄贈になる。

塗りは輪島塗りの専門家による。いまの価格で五千万円以上だとのことである。昭和三十八年だんじり復興三十周年を迎へ、だんじり幕等大修理が完成した。これには谷口徳一氏がその計画執行に功労があり、だんじり青年一同から感謝状を受けてゐる。ちなみに神輿は森本とく(みどり)の寄付による。さて大だんじりを新調したその復興のさいにこれが小だんじりとされた。

上部の小だんじりはこれにくらべると小さくて軽い。それは大正十四年五月の北但大震災の際に薬師さんのだんじり小屋で被害を受けずに残つたからである。なお大きさは震災前の狭い湯島の道に似合させて造られたものであろう。

